

病虫害発生予察特殊報第3号

病 名：トルコギキョウえそ萎縮病（仮称）
病原ウイルス：Lisianthus necrotic stunt virus (LiNSV：仮称)

1 発生経過

近年、県内のトルコギキョウ産地において、ウイルス病害に特徴的なえそ性の斑点や萎縮症状が発生し問題となっていた。発生様相が土壌伝染性ウイルス病害の特徴を有することから、県野菜花き試験場において、えそ症状を呈する株からウイルスを分離し、性質を調査したところ、トルコギキョウでは報告がない新規のトンプスウイルスであることが判明した。さらに、県野菜花き試験場と宇都宮大学農学部植物病理学研究室とのゲノム解読等の共同研究により、本ウイルスはトンプスウイルス属の新種であるトルコギキョウえそ萎縮ウイルス（仮称）であることが判明した。

2 ウイルスの性質

- (1) 本ウイルス粒子は、外被タンパク質の分子量が39～40kDaで、径約30nmの球状である。
- (2) 本ウイルスは土壌伝染性のウイルスであり、根部に生じた傷から接触伝染する。

3 宿主範囲

16科34種の植物に対して接種試験した結果、全身感染する植物は、トルコギキョウの他には、*Nicotiana benthamiana*及び*N.clevelandii*（いずれもナス科タバコ属の観賞用植物）の2種のみであった。

表1 トルコギキョウ感染葉から分離されたウイルスの寄主範囲（抜粋）

科名	植物	病徴		科名	植物	病徴	
		接種葉/上位葉				接種葉/上位葉	
アカギ科	ホウレンソウ	CS	/	キク科	レタス	NS	/
	フダンソウ	CS, NS	/		ヒヤクニチソウ	NS	/
アブラナ科	ハクサイ	-	/	ナス科	トマト	CS	/
	コカブ	-	/		ナス	CS, NS	/
イネ科	オムギ	-	/		トウガラシ	CS	/
ウリ科	キュウリ	CS	/		パチュニア	(-)	/
	マクワウリ	CS	/	<i>N. benthamiana</i>	CS	/	
	ユウガオ	CS	/	<i>N. clevelandii</i>	CS	/	
	スイカ	NS	/	マメ科	ササゲ	NS	/
ハマズナ科	ツルナ	CS	/		インゲンマメ	CS, NS	/
ヒユ科	センニチコウ	CS, NS	/		エントウマメ	NS	/
ゴマノハグサ科	キンギョソウ	CS, NS	/				

注) CS：退緑斑点, NS：えそ斑点, CM：退緑斑紋, NM：えそモザイク, (-)：無病徴, -：感染なし

4 トルコギキョウにおける病徴等

はじめ、葉に白色のえそ斑点を生じる。やがて、えそ斑点が全身に現れるとともに萎縮症状を呈する。下葉のえそ斑点は拡大し、大型のえそ斑紋となる。頂部から数節にかけては退緑やねじれを生じ、葉には輪郭の明瞭なえそ斑点を生じる。多発する時には発病株を中心に坪状に発病が拡大する。

トルコギキョウえそウイルス（LNV）による症状と酷似しており、肉眼での識別は困難である。本病は、高温期の抑制作型よりも加温促成栽培作型で発生が多く見られている。



図1 感染初期のえそ斑点



図2 坪状に枯れ込んだ発生ほ場

5 防除対策

- (1) 土壌伝染するので、昆虫媒介性のウイルスとは区別して対策を講じる必要がある。
- (2) 坪状に前述のような被害が発生するなど、本ウイルスの感染が疑われる場合には、病虫害防除所や農業改良普及センターに相談し、ウイルス診断に基づく防除対策を講じる。
- (3) 適切な土壌水分管理に努める。
- (4) 発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ処分する。
- (5) 発病ほ場では、連作を避ける。
- (6) 種子伝染の可能性もあるので、発病ほ場からは採種しない。



図3 えそ斑をともなった萎縮症状